主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	西木　政統

主 論 文 題 名：

薬師如来の信仰と造形――天台宗における展開を中心に――

（内容の要旨）

本研究は、日本における薬師如来の信仰と造形について、天台宗の造像を中心として、古代から中世にかけての展開を追うことで、その仏教美術史上の意義を明らかにするものである。

薬師如来については、疾病平癒の効能がひろく知られており、多くの堂塔にその姿をみることができる。薬師経典は 4 世紀ごろから漢訳がはじまっているのにくわえ、梵本が発見されたことにより、その信仰がインドに遡ることはまちがいないとみられるが、現存作例はほとんど知られていない。さらに、中国や朝鮮半島でもほかの尊像に比して遺品がすくないことをふまえると、日本において古代から今日に至るまで数多くの造像がおこなわれ、篤く信仰されてきたことは、薬師如来の信仰史において特筆すべきことといえる。

たとえば、680 年に天武天皇が皇后の病気平癒を祈り薬師寺建立を発願したことにはじまり、延命長寿や浄土への往生、外敵の調伏、戒律の護持など、経典に記された幅広い利益により、官寺・私寺の別なく篤い信仰を得ている。しかしながら、一般に薬師信仰の盛んであったのは平安時代前期と認識されているうえ、実際に優品が多く残ることもあり、個別の作品論はこの時代を中心としているほか、薬師如来像を扱う概説書が中世の造像まで含むことはほとんどない。一方で、中世を通じて修法例は枚挙にいとまがなく、現存遺品もたいへん多いため、通時的な視野をもつ薬師研究が望まれる状況といえる。

そこで、本研究ではこれほど薬師信仰が普及した背景として、天台宗の存在に注目する。天台宗と薬師如来の関係については、開祖である最澄が薬師信仰者であったとみられるうえ、延暦寺の根本中堂にはその自刻伝承をもつ薬師如来像（以下、根本中堂像）が本尊として朝野の尊崇を集めてきたことが留意される。最澄自刻の薬師如来像に対する信仰は、その模刻である「天台系薬師」の造像をとおして全国に広がり、各地の拠点となる天台寺院に祀られることで、天台勢力の教線拡大にも益するものであった。その信仰は平安時代を盛期とするが、中世以降も霊験仏と結びつきながら独自の展開を遂げており、日本の薬師信仰を考えるにあたり、天台宗における造像は重要な視点となるも

のである。

こうしてみると、薬師信仰の展開については三期を設けることが可能であろう。まずは、最澄による薬師信仰と、その前提となる南都仏教における薬師造像が問題となる。なぜ最澄が薬師信仰に注目し、当初の尊像はどのような姿で、何を期待されたのか。そして、平安時代を通じてその姿と役割は変容を遂げ、数多くの「天台系薬師」と呼ばれる模像とともに、天台の薬師信仰は各地に広まっていった。さらに中世において、とりわけ東国では新たなかたちで受容されるに至る。ここに、天台系の薬師信仰を核としながら、その古代から中世にかけての変容と展開が浮かびあがるが、いまだかつてこうした視点で薬師信仰について考察をくわえたものはない。しかし、本論で試みるように、天台系の薬師信仰を対象として、その古代から中世への転換をみるならば、そこに薬師信仰の特質が指摘できると考える。

よって、本論では、現存遺品に対する図像学的な視点を中心としながら、史料解釈を踏まえつつ、天台系の薬師信仰の成立と展開、さらに古代から中世にかけての変容の過程を明らかにする。以下、3 章 9 節の構成で論を進める。

まず、「第 1 章 奈良時代の薬師信仰と最澄」では、天台宗の薬師信仰を考えるにあたり、その前史ともいうべき南都仏教における動向と、最澄の薬師信仰について考察をおこなう。たとえば、「第 1 節 最澄の薬師信仰と戒律」では、奈良時代の薬師信仰に認められる戒律とのかかわりに、最澄の信仰をみる。従来、最澄個人の問題とみなされることが多かったが、最澄は奈良時代の南都仏教を学び、国分寺に出家した学僧であり、そこには戒律と強く結びついた鑑真および唐招提寺周辺の薬師信仰がすくなからぬ影響を及ぼしたのではないか。南都仏教における薬師信仰の捉え方のひとつに、薬師経典にも説かれる戒律との関わりがあった。この時期、そうした信仰を反映した可能性のある造像として、福島・勝常寺の例が挙げられる。その都ぶりの造形と用いられた高度な制作技法から、南都・法相宗の僧である徳一の関わりがうかがわれるものだが、彼が戒律の堅持でも知られた僧であったことは示唆的である。この時期、各地に南都寺院の営む山林寺院の存在が指摘されるが、いずれも都の喧騒を離れた浄地において、戒律を堅持して行を修めることが目的のひとつであった。根本中堂に安置された当初の薬師如来像は伝わらないが、その本来の造像意図には、戒律を護ることによって、鎮護国家が果たされるという見方が想定され、大乗戒壇設立を悲願とした最澄が薬師如来を本尊に選択したのは必然でもあった。

最澄の薬師信仰がこうした南都仏教を背景としていることは、のちに根本中堂像の手勢とみなされた智吉祥印が奈良時代の薬師如来像に認められることでも了解される。「第 2 節 南都における薬師如来の図像」では、江戸時代に南都よりもたらされたこと

がわかる、大阪・獅子窟寺の薬師如来坐像を取りあげる。獅子窟寺像は、眉を刻線であらわし、足先を衣で包む。こうした南都での造像を思わせる古様な造形は、唐代の遺風を伝えるものとしても評価されるが、そうした観点から注意されるのは、左手を胸前にあげて宝珠（後補）を載せる手勢である。これは、のちに根本中堂像の手勢に仮託される智吉祥印のかたちに類するもので、やはり天台系の薬師如来像が、奈良時代に成熟をみるこうした図様を採用した経緯が想像され、興味深い一例ということができる。

さらに、「第 3 節 地方に波及する薬師造像」では、天台宗の教線拡大に際して、奈良時代から平安時代にかけて各地に普及した薬師如来を祀る寺院が天台化されている事実に注目する。たとえば、岩手の古刹、黒石寺には像内の墨書銘から貞観 4 年（862）に制作されたことが判明する薬師如来坐像が伝わるが、のちに円仁の中興を伝え、天台化して今日に至っている。黒石寺像は、造像銘記をともなう木彫像としては最古のものとして名高いが、従来はその特異な表情から東北における蝦夷調伏などを目的に造られたと考えられることが多かった。しかし、赤外線撮影に及び、あらためて銘文を精読すれば、そこには鎮魂や息災を願う土地の有力者の姿がみえてくる。造形の水準や規模から考えても、至近に位置する胆沢城との関連がうかがえるが、こうした古代寺院を基盤として、天台宗は全国に教線を拡大することができたのである。ここに、天台仏教が既存の薬師信仰を土壌としながら各地に展開したものであることが明らかとなる。

つづく「第 2 章 天台系薬師の成立と展開」では、今日では原像が失われている根本中堂像について、文献史料によってその姿を明らかにし、模刻と思われる作例、いわゆる「天台系薬師像」について分析をくわえる。まず、「第 1 節 延暦寺根本中堂の薬師如来像とその模刻」において、根本中堂像に言及する文献史料を整理し、像高を五尺五寸程度とし、初代天台座主義真によって彩色されたことにちなむ、朱衣金体という、着衣に朱彩し、肉身に漆箔を施す表面仕上げを確認する。ただ、手勢については早くも平安時代から諸説あり、実際にはさまざまな印相がおこなわれたように思われる。こうした特徴に照らし、なるべく初期の、忠実におこなわれたとみられる模像として奈良・室生寺金堂像を取りあげ、天台系薬師としての意義を明らかにする。金堂内にあっては、すでに天台系薬師の典型として知られる伝釈迦如来像が本尊として信仰を集め、同様の機能を担うもう一躯の天台系薬師像は他堂からの移入像と捉えられることが多かった。ところが、光背や台座の形式からも室生山内での造像と考えざるを得ないため、室生天台時代に金堂へ追納された可能性を指摘する。造像事情を異にする同一尊像が並存するありかたは、むしろ根本中堂の状況を思わせるところがあり、往年の天台文化を伝えるものとして重要である。

また、「第 2 節 天台系薬師如来像の諸相」では、あらためて根本中堂像の概要と沿革を確認しつつ、これを模した「天台系薬師像」のバリエーションについて概観する。先述のとおり、史

料上の記述や根本中堂に複数安置された薬師如来像の特徴から考えて、根本中堂像の模刻は確かに存在したとみられる。しかし、手勢について異説が多いうえ、像高や表面仕上げ、姿勢などを違えた異形とも呼べる模刻の存在が問題となる。むしろ秘仏とされた根本中堂像については、諸説にもとづく模刻とそのバリエーションこそ、信仰の伝播過程を証するものとして注目すべきである。『法華経』の教主として、薬師如来以上に天台で重視される釈迦如来との同一視もそのひとつであり、かえってさまざまな造形がありえたことにより、模刻を媒介として薬師信仰が盛んにおこなわれたことを指摘する。

これは「第 3 節 天台系の七仏薬師とその造像」で取りあげる七仏薬師像についても該当する。七仏薬師法については、天台の四箇大法としてひろく知られるが、造像記録に徴してもこれは明らかである。そこで注目されるのは、やはり根本中堂に七仏薬師像が安置されていたことで、一説に円珍発願とも伝えて信仰を集めたとみられるが、施無畏与願印をとる二尺の檀像というその姿から想起されるのは、滋賀・鶏足寺七仏薬師像である。鶏足寺像は、独尊であったとみられる平安時代ごろの中尊像に対して、鎌倉時代に脇尊を補ったとみられる点が興味深い。古仏の再利用が七仏薬師に多いところからも重要な作例といえるが、中世に天台化を遂げる当地の歴史をみても、これにふさわしい尊像として根本中堂の七仏薬師像を襲う形姿でととのえられたものと思われる。さらに、各地に比叡山や延暦寺、根本中堂といった地勢や堂塔を再現する試みがおこなわれており、薬師如来や七仏薬師がこの中核として果たした意義を認めることができる。

そして、「第 3 章 中世の天台系薬師信仰」において、平安時代を通じて各地に展開した天台系の薬師信仰が、鎌倉時代から盛んとなる霊験仏信仰の高まりを受けて、変容していく過程に注目する。これは、「第 1 節 東国における薬師如来像の変容」で述べる、三国伝来の由緒をもつ京都・清凉寺の釈迦如来立像とその模刻に特有の波状髪と、根本中堂像の手勢とされた智吉祥印をあわせて採用する、東京・東善寺像に代表的な造像が関東に多くみられることに典型的である。とくに、中世以降の天台教学においては釈迦と薬師の同体説が唱導されており、そのうえ、霊験で知られる清凉寺像と根本中堂像が結びついたものと理解される。

「第 2 節 一日造立仏と薬師信仰」では、さらなる興味深い展開として一日造立仏との関係を取りあげる。前述した清凉寺式の波状髪を採用した薬師如来像は、管見の限り 40 件ほど確認されるが、その半数程度が立像となるうえ、多くが左手を屈臂して水平に前方へ伸ばしている。これは比較的めずらしいもので、興味深いことに近年明らかにされた根本中堂像の手勢に一致する。等身像で素地仕上げのものが多いところからも、根本中堂像の姿が本歌として採用されたものとみられる。なかでも、とりわけ素朴な作風

を示す一群が目を惹くが、これは一日造立仏という、短時日で像の制作をおこなう特殊な造像作法によることが推測される。文献では『吾妻鏡』にも造像例が見出せ、ことに天台僧の関与が認められることから、こうした根本中堂像の手勢が取り入れられた可能性を指摘する。

こうして、最澄自刻とされる根本中堂像が、さまざまな形で中世以降も信仰の対象でありつづけたことが明らかとなるが、一部にみられる定印をとる薬師如来像においても、天台寺院で見出されるところが注意される。「第 3 節 定印薬師の成立と展開」では、もっとも早いものとして、神奈川・覚園寺の薬師如来坐像に定印が採用された背景にはじまり、天台において注目されるところに及ぶ。覚園寺像は、南北朝時代、文和 3 年（1354）の再興像から宋代図像の一環としてこの手勢を採用したものと考えられ、これを契機として定印の薬師如来像が普及した可能性を指摘するが、のちに永正 6 年（1509）の銘をもつ神奈川・妙楽寺像や、同じころの造立とみられる東京・明静院像など、関東の天台寺院において類品がみられるようになる。天台の事相書には釈迦如来を介して定印を説明するものもあり、すでにみた天台教学における釈迦薬師同体説が、ふたたび力を得たものと解釈される。これも、天台における薬師信仰の、中世以降の変容を特色づける一例と捉えられるが、同時に古代寺院の天台化をも想起させ、天台勢力の伸張において薬師信仰の占める意味がちいさくなかったことが知られる。

最後に、「結論――総括と展望」において、本研究の要点をまとめ、今後の展望に及ぶ。本論は、天台宗における造像を中心として、古代から中世にかけての薬師信仰の系譜と変容をたどることで、日本における薬師信仰の特質について考察するものだが、まずその背景として奈良時代以来の薬師信仰があることを指摘し、これが図像や造形においても認められることを述べる。さらに、根本中堂像をめぐる模刻のありかたについて、その成立と展開の類型を明らかにしつつ、異説にもとづく多様な模刻がおこなわれたことに意義を認めている。また、中世以降、根本中堂像の造形的な特徴が部分的に受容され、変容していく様相を明らかにすることで、通時的な視野により現存遺品に分析をくわえ、史料解釈を交えながら、天台関係の造像が薬師信仰の伝播と普及に果たした役割について解明を試みるものである。

天台宗における薬師信仰が重要性をもつのは、最澄を媒介として古代から中世にかけて途切れることなく続いていることによる。もちろん、狭義の「天台系薬師」に限れば、平安時代中期、10 世紀ごろを盛期とする信仰の高まりに過ぎないが、中世以降も変容を遂げながら、造形の引用を通して確実にその足跡を辿ることができる点は見逃しがたい。

また、最澄が薬師如来像を礼拝対象に選んだとき、像の表面が素地仕上げであり、五

尺五寸程度の大きさだった。この「檀像」としての表現は、のちに衣を彩色し、肉身に漆箔を施した「朱衣金体」とすることで、優填王の釈迦如来像とも同一視されるようになり、中世においても一日造立仏や鉈彫りという観念と結びつく要因となる。期待された役割についても変容を蒙りながら、あらたな読み換えがなされるようになった。『法華経』を聖典とする天台教学において、薬師如来の存在はつねに解釈を要求する問題でもあったが、一方で教学的な厳密さから自由であったからこそ、こうした変容が許容され、継承されていったとみられる。こうした視点は、同じく比叡山の横川観音堂で信仰を集めた聖観音菩薩像や、園城寺で円珍により感得された黄不動像にも通じるところがある。本論は、薬師信仰の伝播と普及の様態を解明するとともに、教線拡大における模刻の活用という問題、また仏教美術における「模」や「写」の問題にまで波及する視野を提供するものである。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	NISHIKI Masanori

Title of Thesis:

The Worship and Depiction of Yakushi Nyorai: With a Focus on Developments within the Tendai Sect
薬師如来の信仰と造形――天台宗における展開を中心に――

Summary of Thesis:

Yakushi Nyorai is widely known for his power to heal the sick and images of him are found at numerous temples in Japan. It is believed that scriptures on Yakushi were first translated into Chinese around the 4th century, while Sanskrit texts prove that he was also worshipped in India. However, very few surviving Yakushi images of Indian origin are known and this deity's roles in China and Korea are also unclear. In Japan, however, numerous Yakushi images have been created and ardently worshipped from antiquity to the present.

When exploring the spread of Yakushi images in Japan, one should not overlook the Tendai Sect and its founder, Saichō. He worshipped Yakushi Nyorai and carved an image of him at the Konpon Chū-dō of Enryakuji Temple (hereafter referred to as the "Konpon Chū-dō image"). The worship of this image spread throughout Japan by means of replicas.

This paper clarifies the significance within Buddhist art history of the worship and depiction of Yakushi, tracing relevant developments from antiquity to the medieval period mainly within the Tendai Sect. The contents and summary are as follows:

Chapter 1: Yakushi Worship in the Nara Period and Saichō
Section 1: Saichō's Yakushi Worship and Religious Precepts
Section 2: The Iconography of Yakushi in the Nara Region
Section 3: The Spread of Yakushi Images to the Provinces
Chapter 2: The Establishment and Development of Tendai Yakushi Images
Section 1: The Yakushi Image of the Konpon Chū-dō and its Reproductions
Section 2: The Various Aspects of Tendai Yakushi Images
Section 3: The Images of the "Seven Yakushi Nyorai" of the Tendai Sect
Chapter 3: The Worship of Tendai Yakushi Images in the Medieval Period
Section 1: Changes in Yakushi Images in Eastern Japan
Section 2: The Ichinichi-zōryūbutsu and Yakushi Worship
Section 3: The Establishment and Development of Jō-in Mudra Yakushi Images

In Chapter 1, I focus on the relationship between Saichō, the Chinese monk Jianzhen, and the Hossō Sect monk Tokuitsu within the context of religious precepts, noting that Saichō hoped for Yakushi to protect these precepts. It is also clear that Saichō's worship of Yakushi was influenced by Nara Period

Buddhism and that the Chikichijō-in mudra of the Konpon Chū-dō image is the same as the mudra of Nara Period Yakushi images. Moreover, temples where Yakushi images were worshipped (these images spread throughout Japan from the Nara to the Heian Period) were converted to the Tendai sect, therefore allowing this sect to expand its authority through the worship of Yakushi.

In Chapter 2, I surmise the form of the original Konpon Chū-dō image, which is now lost, through textual sources, and also analyze the images though to be its replicas. I believe the original image's characteristics included a height of approximately five shaku and five sun (about 160 cm) as well as red clothing and a gold body. However, there has been disagreement about its mudra since the medieval period. Although recent scholarship has determined this mudra, in this paper I focus on replicas with a different mudra and their variations, arguing that these variations helped the worship of Yakushi to thrive. One reason for these variations is the belief that Yakushi and Shaka Nyorai, who was considered even more important than Yakushi because of his appearance in the Lotus Sutra, are the same deity.

In Chapter 3, I focus on how the worship of Tendai Yakushi images was influenced by faith in miracle-performing Buddhist deities that arose in the Kamakura Period. Such influence is well illustrated by images in the Kanto region that combine wave-like hair specific to a Shaka image at Seiryōji Temple in Kyoto, with the mudra of the Konpon Chū-dō image. This combination of images is a result of the Tendai belief that Yakushi and Shaka are the same deity, and the fact that both the Seiryō-ji and Konpon Chū-dō images were thought perform miracles.

Furthermore, the Ichinichi-zōryūbutsu – images created in response to urgent requests – also feature the mudra of the Konpon Chū-dō image, showing that faith in this image continued from the Medieval Period in various forms.